

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：22701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370722

研究課題名(和文) 大学初年次生を対象とした英語基礎力測定テストの開発及びその形成的利用法の構築

研究課題名(英文) Developing a basic English diagnostic test for university freshmen and constructing a formative use of the test

研究代表者

加藤 千博 (KATO, Chihiro)

横浜市立大学・国際総合科学部・准教授

研究者番号：20638233

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、大学初年次生を対象とした英語基礎力測定テストを開発し、そのテストを利用して形成的アセスメントを可能とする授業方法・評価方法を考案することである。

大場昌也氏が開発したR(リーディング語彙)テスト、L(リスニング語彙)テスト、G(基礎文法)テストからなる「RLGテスト」を利用して、大学生の語彙、文法の習得傾向、及びTOEFL/TOEICとの相関を分析した。得られた結果を基に、授業での効果的な語彙・文法指導を考案し、授業実践を行った。同時にRLGテストの別バージョンの開発を行った。研究成果はホームページ上に公開し、「WEB版RLGテスト」を誰でも受験できるようにしてある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to develop a diagnostic test to measure basic English skills of university freshmen focusing on their vocabulary and grammar, and to construct a teaching method making use of this diagnostic test, which leads to a formative assessment.

RLG Test is composed of reading vocabulary test, listening vocabulary test, and basic grammar test. We analyzed data of about 3000 students and found the tendency in their acquisition of vocabulary and grammar knowledge as well as its correlation with TOEFL/TOEIC scores. We proposed an effective teaching instruction for vocabulary and grammar study from the obtained data, and conducted a lesson. We also developed different versions of the tests. We created our homepage to publicize our achievements, where anyone can take the tests for free.

研究分野：英語教育、イギリス文学

キーワード：英語教育 教育効果・測定 英語基礎力測定 語彙 文法 形成的評価

### 1. 研究開始当初の背景

近年日本人大学生の英語力測定に英検、TOEFL、TOEIC といった外部試験が広く利用され、大学ごとにクラス分けや到達度の判定基準にも用いられている。各試験はそれぞれ目的と測定方法に違いはあるものの学習者の英語力を客観的に計測するうえで非常に有用な手段である。しかしながらこれらの外部試験は学習者個人に対して個別の学習方法を提示するものではない。特に現在は就職活動への準備において TOEIC を受験する大学生が急増しているが、そのスコアは受験者の英語力を客観的に数値化した一尺度にすぎない。ところが現状では大学生学習者はスコアを少しでも上げようとして本来の目的であるはずの英語力向上からかけ離れた学習方法に陥ってしまうことが少なくない。スコアアップが目的となってしまう、英語使用や英語スキルの向上という本来の学習目的を見失いがちである。また大学や教員側も学生の英語学習の進捗状況や到達度を外部試験を用いて測定する以外に客観的な評価方法を見出すことを怠っており、学習者の学習過程に重点を置いた評価方法(形成的アセスメント)を取り入れることが少ない。ここには本来「言語学習は生涯に渡って継続されるべきものである」(Council of Europe, 2001)という視点が抜け落ちてしまっている。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、大学初年次生を対象とした英語基礎力測定テストを開発し、そのテストを利用して形成的アセスメントを可能とする授業方法・評価方法を考案することである。具体的には、(1)リーディング語彙力、リスニング語彙力、及び基礎文法力を測定する英語基礎力測定テストを開発し、そのテストデータを基にして(2)学習者の習熟度に応じた最も効果的な学習方法を考案したうえで、(3)学習者に対して自律的学習を促進するツールを提供し、(4)教育者に対しては形成的アセスメントを促進する評価方法を提案する。本研究により、これまで一人一人の習熟度レベルには対応することが困難であった授業運営から、学習者個人の学習上の問題点を考慮しつつ自律的学習態度を養成する授業スタイルへと変容させるカリキュラム構築が期待される。

### 3. 研究の方法

本研究では、大学初年次生を対象とした英語基礎力測定テストを開発し、そのテストを利用して形成的アセスメントを可能とする授業方法・評価方法を考案することを目指す。研究目的で示した4つの具体的な目的を3年間で達成する。25年度は、リーディング語彙力、リスニング語彙力、及び基礎文法力を測定する英語基礎力測定テストを発展させる(完成済みである4つのバージョンのRLGテストに更に5~6つのバージョンを

作成し、その等価性と信頼性を検証する)。26年度は、テストデータの分析を行い、学習者の習熟度に応じた最も効果的な学習方法を考案し、更に、学習者に対して自律的学習を促進するツール(自己評価票やポートフォリオ)を開発・提供する。27年度は、教育実践者から広く意見を求めながら、形成的アセスメントを促進する評価方法を考案し、その効果を検証する。

### 4. 研究成果

#### (1) RLGテストの開発・改良

RLGテスト作成の理論を開発者より学び、現在ある4つのバージョンの等価性を検証したうえで、新たなバージョンの開発を試みた。またWEB公開用にテストを改訂し、「WEB版RLGテスト」を作成し誰でも無料で受験できるようにした。WEB版では自動採点、復習、弱点ポイント、TOEFL・TOEIC得点予測の機能を追加し、自己診断から自律学習へと繋がるよう配慮したプログラムとした。



画像1 WEB版RLGテスト

#### (2) 研究参加者データの分析

<25年度>

関東圏の3大学に所属する初年次生302名を対象にRLGテスト、TOEFLもしくはTOEICスコアと自己評価票の記述内容を分析し、レベル別の学習課題を考察した。自己評価票の記述分析に際しては、レベルに即した適切なフィードバックが与えられるようにするため、基礎レベル(TOEIC400点相当を目指す)グループと実用レベル(TOEIC600~730を目指す)グループに区分して分析を行った。

結果、両グループ間にレベル差により多少の違いは見られるものの根本的な学習手法に関しては大きな違いが見られなかった。両グループともに英語学習の主目的が外部試験でのスコア

アップとなっており、学習方法も暗記や詰め込みといった受験勉強のスタイルから抜け出せていない。しかしながら社会が大学生に求めている英語力は単なる TOEIC や TOEFL のスコアではなく、実際の社会の場で使用することのできる、言わば実践的な英語力である(小池, 2010)。よって、試験で正答するための学習ではなく、実際の使用場面を想定した実践的な学習及び練習が必要である。そのためには学習目標のベクトルを試験対策から実践使用へと大きく転換させるようなカリキュラムと授業運営が必要であることを再確認した。

#### <26 年度>

関東圏の1大学の初年次生 802 名を対象に TOEFL-ITP と RLG テストを、特に語彙パートに焦点をあてて分析し、学生のレベル別の語彙習得傾向と使用教科書の語彙レベルの適正に関して調査を行った。

結果、習熟度別に明確な語彙習得傾向の差が表れた。TOEFL550 点以上のグループは R 語彙と L 語彙のギャップがほとんどない「R 語彙=L 語彙」型の習得傾向を示した一方、他のグループは「R 語彙>L 語彙」型の習得傾向を示した。上級グループ以外では音声を取り入れた語彙学習が必要であることが確認された。

教材の語彙レベル適性に関しては、教科書の語彙分析と学生の語彙定着率との比較から、いずれのレベルにおいても Reading の教科書、Listening の教科書ともに易しすぎることはないことが明らかとなった。しかしながら Reading 用の初級と中級レベルの教科書は未知語の割合が 10%前後を占め、推測で読み進めることは困難なため、language focused learning を意識した pre-reading や語彙確認の活動を伴う必要がある。Listening 用の教科書においては、初級と中級レベルは未知語の割合が 15%前後とかなり高いため、推測力を高めるためにも視覚を交えたヒントを与えながら使用するという工夫が必要であることが判明した。

今回学習者の語彙定着率と教科書の内容語数の分布を分析する際にもう一点明らかとなったことは、教科書のレベル差は語彙の「広さ」だけでなく「深さ」にもよることである。つまり、語彙数や語彙難易度よりも、語彙の持つ語法関係、文脈による適切さによって教科書のレベルが左右されており、いかに 2000 語レベルまでの語彙を実用的に使用できるかが求められている。語彙学習において単なる暗記方式では実践的な英語力の養成にはならないことを改めて認識することとなった。

#### <27 年度>

関東圏の1大学の初年次生 798 名を対象に TOEFL-ITP と RLG テストを、特に文法パートに焦点をあてて分析し、学生のレベル別の文

法項目習得傾向を分析した。表 1 は RLG テストの文法パートを構成する文法領域と文法項目を示しており、表 2 は習熟度ごとの各領域別正答率を示している。

領域	文法項目
A <品詞>	基本 4 品詞(名詞・動詞・形容詞・副詞)、その他の品詞、単数・複数
B <文と呼応>	動詞の時制(過去形と現在形)、動詞型(文型)、代名詞など代用表現
C <動詞の拡充>	助動詞、完了形、進行形、受身形
D <文の拡充>	強調文、否定文、Yes/No 疑問文、WH 疑問文
E <動詞の転換>	不定詞、動名詞、現在分詞、分詞構文
F <文の転換>	名詞節、副詞節、形容詞節、仮定法

表1 G テストを構成する文法領域

領域	TOEFL 550 以上	TOEFL 500-547	TOEFL 450-497	TOEFL 400-447	TOEFL 350-397
A	89.0%	85.2%	81.1%	76.7%	72.4%
B	94.5%	91.8%	87.2%	82.5%	75.8%
C	89.5%	79.9%	71.2%	65.3%	70.3%
D	88.0%	78.6%	70.2%	64.5%	59.4%
E	92.0%	78.1%	69.2%	61.4%	53.6%
F	94.0%	85.3%	76.9%	67.5%	63.0%

表2 各グループの領域別平均正答率

このデータから最上位グループ以外はどこも E、F 領域が弱いことがわかる。また誤答傾向の分析からは、いくつかの文法項目においてはグループ横断的に難しい問題として留まることが判明した。コミュニケーションを軸に据えたカリキュラムや授業設定において、文法をいかに扱うかが課題であることが明らかとなった。

#### <RL (語彙) テストと JACET5000 の相関>

大学生 10 名を対象に R テストと L テストのスコアと語彙リスト JACET8000 中の 5000 単語との相関を調査した。結果、両テストとも 0.8 以上の有意な高い相関が見られたが、L テストの方が相関指数は高かった。これが何を示すのかは今後引き続き調査検討していく。この 10 名のパイロットスタディから R テストで 30 点であれば、JACET 語彙リスト中 3000 単語程度の獲得語彙数であることが予測できることが示された。

#### (3) 自律的学習ツールの開発

RLG テストに付随する自己評価票を作成し 25 年度の研究参加者対象にその記述内容を分析した。分析内容は前述のとおりであるが、この自己評価票には自分の弱点項目をチェックしたうえで、学習課題と学習目標を記入する欄がある。今後はこの自己診断ツールを改良し WEB 版 RLG テストに組み込んでいく。

#### (4) 形成的評価を促進するカリキュラム構

## 築

外部試験をクラス分けや期末試験として利用する大学において、この RLG テストをどのように利用できるかを検討した。クラス単位で教員が利用することは可能であることが実証されたが、全学的なカリキュラムの中でどう利用していくかは今後の検討課題となった。

### <参考文献>

小池生夫 監修(2010)「企業が求める英語力」

東京:朝日出版社

Council of Europe (2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment.*  
Cambridge: Cambridge UP.

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### [雑誌論文](計 2件)

加藤千博、田島祐規子、村上嘉代子、前川浩子、RLG テストの形成的利用法 - 語彙レベルから判断する教材適性 -、中部地区英語教育学会紀要、査読有、第 44 号、2015、49-56  
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009975470>

村上嘉代子、田島祐規子、加藤千博、前川浩子、自己評価票を用いた「RLG テスト」の形成的利用、中部地区英語教育学会紀要、査読有、第 43 号、2014、109-116  
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009841159>

#### [学会発表](計 4件)

田島祐規子、加藤千博、村上嘉代子、前川浩子、文法の基礎知識を測る G テストから TOEFL スコアアップの文法指導へ、中部地区英語教育学会、第 45 回和歌山大会、2015 年 6 月 28 日、和歌山大学(和歌山県・和歌山市)

加藤千博、田島祐規子、村上嘉代子、前川浩子、RLG (語彙・文法) テストの形成的利用 - 語彙レベルから判断する教材適性 -、中部地区英語教育学会、第 44 回山梨大会、2014 年 6 月 22 日、山梨大学(山梨県・甲府市)

TASHIMA Yukiko, MURAKAMI Kayoko, KATO Chihiro, An Analysis of RLG Test Scores and its Formative Use for Japanese University Freshmen: To reach 400 or 600 points on TOEIC, The 52<sup>nd</sup> JACET International Convention, 8/30/2013, Kyoto University (Kyoto)

村上嘉代子、田島祐規子、加藤千博、前川

浩子、RLG (語彙・文法) テストの形成的利用 自己評価票から主体的な学びへ、中部地区英語教育学会、第 43 回富山大会、2013 年 6 月 30 日、富山大学(富山県・富山市)

#### [その他]

ホームページ等

<http://rlgtest-english.com/>

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

加藤 千博 (KATO, Chihiro)

横浜市立大学・国際総合科学部・准教授  
研究者番号: 20638233

#### (2) 研究分担者

田島 祐規子 (TASHIMA, Yukiko)

横浜国立大学・国際戦略推進機構・教授  
研究者番号: 70377117

村上 嘉代子 (MURAKAMI, Kayoko)

芝浦工業大学・工学部・准教授  
研究者番号: 90424895

前川 浩子 (MAEKAWA, Hiroko)

金沢学院大学・文学部・准教授  
研究者番号: 10434474

#### (3) 連携研究者

マクガリー カール (McGARY, Carl)

横浜市立大学・国際総合科学部・教授  
研究者番号: 60377116

高橋 邦年 (TAKAHASHI, Kunitoshi)

横浜国立大学・教育人間科学部・教授  
研究者番号: 00154815

#### (4) 研究協力者

大場 昌也 (OBA, Masaya)